寺島実郎著「何のために働くのか—自分を創る生き方—」文春新書、文藝春秋 2013年6月20日刊を読む

人は何のために働き、そして生きるのか

1. 『後世への最大遺物』

- (1) 内村鑑三は、宗教者として多くの青年の心を揺さぶった。とりわけ『後世への最大遺物』の与えた影響は大きい。
- (2) 『後世への最大遺物』は、1894年、箱根・芦ノ湖畔で開かれたキリスト教徒・夏期学校における内村の講話をまとめたもので、文庫本でわずか71ページの短い講演録である。
- (3) 語られているテーマは、「我々人間は、人生を通じて、この世に何を遺せるのか」という根源的な問いかけである。
- (4) 心に沁みるのは、最後の4行である。
「われわれに後世に遺すものは何もなくとも、われわれに後世の人にこれぞというて覚えられるべきものはなにもなくとも、アノ人はこの世の中に生きていたあひだは真面目なる生涯を送った人であるといわれるだけのことを、後世の人に遺したいと思います」
- (5) 金持ちになることでも、実業家として成功することでも、偉大な思想を遺すことでもない。人がこの世に遺せる最高のものは、「あの人は、あの人なりの人生を、立派にまっとうに生きた」ということである。この短い結論が、青年たちの胸を打った。
- (6) 誰もが後世に遺せるものは、高尚なる生涯である—自分の内面だけを見つめ、宗教者として、ひたすら誠実に生き続けた内村の言葉は、百年以上経ったいまも色あせない。キリスト教徒ではない私も、その凜とした存在感に、ただただ圧倒される。

2. 歴史の進歩のために

- (1) 人生に求めるものは、人それぞれである。社会的な成功や、金儲けを目指してもいい。だが、重要なのはその先である。
- (2) やりがいのある仕事を見つけて、経済的に安定して、自分だけ満足すればそれでいいのか、ということ。「人は何のために生き、何のために働くのか」という「人生の目的」を探ってきた最後に、改めてそれを問いかけたい。
- (3) 仕事を通して時代に働きかけ、少しでも歴史の進歩に加わることが「生きること、働くこと」の究極の意味だと、私は考えている。
- (4) 無論、ひとり人間は豆粒のように小さい。歴史という大河のなかでは、そんな豆粒のごとき個人がいくらがんばっても何も変わりはない。そう達観している人もいるだろう。

- (5) それでも私は、「歴史における個人の役割」は極めて重いものだと受けとめている。個が動かなければ、歴史も動かない。だからこそ、「カセギ」と「ツトメ」の両立の実現だけで満足せず、もう一步踏み込んで歴史の進歩のために尽力すべきだと思う。
- (6) 歴史の進歩についてはさまざまな考え方があり、「人間の歴史に進歩などない。我々は歴史に学ばず、愚かにも同じ過ちを繰り返しているだけではないか」と主張する人もいる。
- (7) 一方、冷戦の時代には、頑なに「歴史は進歩する」と信じていた人たちも存在した。わたしが学生の頃に全盛を極めたマルクス主義では、「資本主義の矛盾が深まれば、労働者が起こす革命によって社会主義体制に移行する。それが進歩である」と考えられていた。
- (8) ところが、冷戦が終わったことでこの歴史観が破綻した。社会主義なるものを「進歩」と捉え、それを夢見ていた一群の人たちは、ソ連をはじめとする社会主義陣営の崩壊によって価値の基軸を喪失し、茫然自失となった。
- (9) 以来 20 年。社会主義社会の実現を掲げていた労働組合も組織としての意味を失い、社会も政治もメリハリを欠くなか、そもそも「歴史に進歩があるかどうか」という設問自体が、空しい響きを持つようになってしまった。
- (10) 冷戦が終わって 20 年、社会がなんとなく迷走を続けている理由は、目指すべき価値の基軸が動揺し続けていることにもある。社会主義が後退し、代わって世界潮流の中心に立つと思われた米国流の金融資本主義も、リーマン・ショックを経て、信頼を失ったままである。
- (11) 時代に流されるまま、「人間の歴史に進歩なんかない」と、あきらめにも近い気持ちが社会を覆っているが、果たしてそれでいいのだろうか。
- (12) 哲学者、市井三郎は『歴史の進歩とはなにか』のなかで、「歴史の進歩とは、自らの責任を問われる必要のないことで負わされる“不条理な苦痛”を減らすことだ」という主旨のことを述べている。生まれながらの貧困、ある国に生まれたという理由だけで差別されること…そんな圧倒的な不条理を、制度的・システムの克服し、苦しみから解放することが歴史の進歩だというのだ。
- (13) この示唆は極めて重要である。なぜならそこに「人間は何のために生き、何のために働くのか」という問いかけに対する、ひとつの答えがあるからだ。
- (14) 自分の責任において担うべきことは、胸を張って担い、その上で、本人の責任を問われるべきでないことで苦しむ人達に温かい眼を向け、不条理な世の中の仕組みや制度を変える気迫を若者には求めたい。
- (15) 「自分探し」はやめて、与えられた持ち場で、目の前の仕事に挑みながら「カセギ」と「ツトメ」の両立を実現する。さらに、その延長線上で、世の中をよりよい方向に変えるために力を尽くす。それが働くということではないかと、これまで繰り返し語ってきた。

(16)じつは、新渡戸稲造の『世渡りの道』にも、こんなことが書かれている。

「己の現在の義務を完全に尽すものが一番エライと思う。而して己の現在の義務は何であるかを確に認め得る人は、人生の義務と目的を解する途に進む者であると思う。故に人生の目的とは何かということ解するには、己の生ける目的を解するに若かぬと思う。自分の生涯の目的を判断するには、徒らに己はエライものであると思うて居ては、判断が出来るものではない。己の居る場所、就ける職業、周囲の要求する義務を、如何に小さくとも、如何につまらなくとも、全く之を尽し、此人ならでは出来ぬ、此人がなくては困る、というだけにならないければ、自分の天職を完うしたものとは云われぬ。従って、人生の目的は何であるかも亦到底解決されたものではないと思う」

(17)新渡戸も、似たようなことを説いていたのだ。そして、自分をよく生かし、人にも「よく生かされる」こと、社会のなかで活動し、同胞を助け、また助けられることが人の人たる道だと、述べているのである。

(18)そうはいっても自分のやる仕事なんて、歴史の進歩などという大それたこととは何の関係もないと、思っている人もいるだろう。

(19)決して、そんなことはないと言いたたい。社会人として政治に向き合う姿勢であれ、社会イノベーションへの貢献であれ、社会をよい方向に導くことに、自分自身や所属する組織が何らかの形で関わることは大いにありうるのだ。

(20)社会にぶら下がって日々を生き延びるだけではなく、仕事を通じて社会的な役割を果たし、歴史が一步でも前に進むよう尽力する。それが人間の役目ではないだろうか。

(21)大量のエントリーシートを記入することだけが就職活動ではない。就職や転職という人生の岐路で、「自分はなぜ働くのか」「人生の目的とは何か」を立ち止まってじっくりと考えてほしい。

(22)そんな思いから、若い人に向けて「働くこと」の意味を語ってきた。

(23)無事に就職が決まっても、それでハッピーエンドではない。大きな壁にぶつかったり、「これでいいのか？」と悩むことも多いだろう。

(24)「この仕事を通じて、自分は世の中にどう関わっているのか」
絶えず自分にそう問いかけることを怠らない社会人になってほしい。

P194 ~ 200

[コメント]

米国ブルッキングス研究所を経て米国三井物産ワシントン事務所長をお務めになり、帰国後、三井物産戦略研究所所長時代に様々な教えを頂いた寺島実郎先生の最新著。いつもものごとを真正面からお考えになる姿勢は高く評価したい。